

# 不可能を意味する「知らず」について

有坂秀世

(一) 天皇大命恐被賜仕奉者拙<sup>久</sup>劣而無所知<sup>母</sup>。不知<sup>母</sup>退<sup>母</sup>。不知<sup>母</sup>天地之心<sup>母</sup>。勞<sup>久</sup>重百官之情<sup>母</sup>。

辱愧<sup>母美奈</sup>。隨神所念坐<sup>神龜元年二月甲午詔</sup>。

(二) 挂畏我皇天皇斯天日嗣高御座<sup>乃業乎</sup>。受賜<sup>且</sup>仕奉<sup>止</sup>。負賜<sup>間</sup>頂<sup>爾</sup>。受賜<sup>理</sup>恐<sup>里末</sup>進<sup>毛</sup>。不知<sup>毛</sup>退<sup>毛</sup>。

(三) 朕又念<sup>久</sup>前聖武天皇<sup>乃皇太子定賜<sup>且比</sup>天日嗣高御座<sup>乃坐</sup>爾</sup>。昇賜物<sup>乎</sup>。伊何<sup>可爾</sup>恐<sup>久</sup>私父母兄弟<sup>爾</sup>。及事得<sup>幸</sup>。甚恐<sup>自</sup>進<sup>母</sup>。不知<sup>母</sup>退<sup>母</sup>。不知<sup>止</sup>伊奈備奏<sup>天平寶字三年六月庚戌詔</sup>。

その他天平寶字二年八月庚子朔詔寶龜元年十月己丑朔詔天應元年四月癸卯詔天長十年三月癸巳詔嘉祥三年四月甲午詔天安二年十一月七日詔元慶元年正月三日詔同八年二月二十三日詔等にも、上の天平勝寶元年の詔のに似たお言葉が拜せられる。これらの中圈を施した句長は之をススム。モシラニシゾク。モシラニと讀んで、いたく恐みてせむすべしられぬ

不可能を意味する「知らず」について（有坂）

さまを詔給ふなり」〔續紀歷朝詔詞解第五詔の釋〕と解してゐるが、その意味ならば寧ろススミ。モシラニシ（リ）ゾキモシラニと讀む方が適當であらう。萬葉集に

（四）石木乎母刀比佐氣斯良受卷五國歌大觀七九四

（五）佐和久兒等遠宇都旦波死波不知同八九七

（六）言不得名不知卷三三一九

（七）言毛不得名付毛不知同四六六

これらはいづれも進み知らず「退き知らず」「問ひ放け知らず」「死に知らず」「名付け知らず」といふ各一つの複合語であつて、（一）（二）（三）（五）（六）（七）の場合には、その二つの構成要素の間に「も」「又は」「は」といふ助詞が挿入されてゐる。これは上代の言語では決して珍しいことではない。

由比底之初乎登伎毛安氣奈久爾萬葉卷十七三九四八

波布都多能由伎波和可禮受同三九九二

可久之都追安比之惠美天婆等积自家米也母同卷十八四一三七

これらは各「解き開く」「行き別る」「相笑む」といふ複合語の二つの構成要素の間に、「も」「は」「し」といふ助詞の挿入された例である。上の（六）（七）の引用文の中で「名付け<sup>△</sup>も知らず」「名付け知らず」と對になつてゐる「言ひ<sup>△</sup>もかね」「言ひかね」などもやはりさうである。かやうに形の上からは二つに

別れてゐても意味の上から見て全く一つに融合してゐるものならば、複合語と呼んで差しつかへは無いと思ふ。それと同じ意味に於て、「進み知らず」等をもここで複合語と呼ぶのである。これらの「知らず」は本來「……するすべを知らぬ」といふ意味であるが、結局は不可能を意味することになる。「進みも知らに退きも知らに」は「進むすべも知らず退くすべも知らず」結局「進まの方も無く退かん方も無し」といふ意味になる。「問ひ放け知らず」は「問ひ放けるすべを知らない」結局「問ひ放けん方無し」といふ意味になる。

この種の複合語は、奈良朝時代には相當自由に作られたもののやうに見えるが、平安朝以後まで保存されたのは唯「言ひ知らず」(言はん方無し)だけである。

そへにとてとすればかかき、かくすればあない。ひしらず、あふさきるさに(古今集俳諧)  
御屏風ども立て渡じ。いひしらずきよらなり(宇津保物語藏開下)

あけぬとて今はの心つくからに、などいひし。らぬ思ひそふらん(古今集戀三)  
かむなびの種松と申す。いひし。らぬ寶の王侍り(宇津保物語吹上下)

以上四つの實例は大日本國語辭典に據つた。但し同書ではこの語を「いひしる」「言知(他動四)」「言ひかたを知る」「言ひ得」「勢語」まだ若ければ、文もをさをさしからず、言葉も言ひ知らず、年中行事歌合、詞いひしりてよろしく侍れども。

不可能を意味する「知らず」について(有坂)

不可能を意味する「知らず」について（有坂）

四

の標目の下に出して居るのであるが、それとこれとは別物のやうに思はれる。「いひしる」(言知)は、言ふことをよく心得てゐる、言ふことに精通してゐる、言ふことに熟練してゐる、といふ方面から「言ひ得」といふ意味に轉じて來たのであるが、問ひ掛け「知らず」などの「知らず」にはそれ程深い意味は無く、ただその場合について、せんすべを知らないといふ意味から、結局不可能をあらはすやうになつてゐるだけのことである。「言ひ知る」「知る」は、一應可能をあらはすものとは言ひ得るけれど、その可能は充分な可能、完全な可能、往く所として可ならざるはない可能であつて、或人の身についた永續的な能力を言ひ表してゐる。従つてその打消である「言ひ知らず」(上に引用された伊勢物語の例の如きは、單にその能力の完全さを否定するのみであつて、全く何も言ひ得ないといふ意味にはならない。即ち未熟無經驗の意味である。之に反して「言ひ知らず」清らなりや「言ひ知らぬ」思ひなどの「言ひ知らず」は、全くどうにもかうにもならない完全な不可能を意味してゐる。

伊勢物語の「言葉も言ひ知らず」に近い「知らず」の用法は、萬葉集の中では

美知乃奈加久爾都美可未波多妣由伎母之思良奴伎美乎米具美多麻波奈卷十七三九三〇

のやうな場合に見られるのである。ここでは「ししらぬ」は熟練精通の否定、即ち未熟無經驗を意味してゐる。今昔物語卷第二十八頼光の郎等共紫野見物の語に「一人が云はく、去來某大徳

が車を借りてそれに乗りて見む。と。亦一人が云はく、乗り知らぬ車（不<sub>レ</sub>乗知又車）に乗りて殿原に値ひ奉りて、落して蹴られて由なき死にをやせむすらむ。とある「乗り知らぬ」なども略同様であるが、これに至つては、未熟といふよりは寧ろ全くの無經驗であるから、伊勢物語の「言葉も言ひず」などの場合とは少し變つてゐる。併し要するに「乗りつけない」「乗り慣れない」といふ、てあるから變つてゐると言つても程度の問題で、結局は前の「言ひ知らず」や「ししらぬ」と同じ「の」用法と言つてよいと思ふ。

「知」といふ言葉が精通熟練従つて能力の所有を意味するやうになつてゐる例は、外國語にも有る。片山正雄氏著「雙解獨和大辭典」wissenの標目の下に「mit inf. mit zu : verstehen, können」出来る、心得てゐる。」として次のやうな例が出て居る。

sich zu helfen wissen 方法を心得てゐる、凌ぎをつけることが出来る。

sich nicht zu fassen (od. halten) wissen 我慢しきれぬ。夢中になりかける。

zu leben wissen 禮儀作法(世)の中の義理人情を心得てゐる。

er weiss es zu machen 彼はその仕方(方法)を心得てゐる。

zu reden wissen 話が上手である、能辯である。

etwas zu tun wissen 或事をする事が出来る。

不可能を意味する「知らず」について（有坂）

不可能を意味する「知らず」について（有坂）

六

なほ同氏著「獨逸文法辭典」に「kennen は主として人又は物の外形を知れる事（人の顔を知れること、面識のあること）、wissen は事實、報知等を知れる事（即ち之に關する知識、記憶、又或事に關する熟練等を有すること）とあることを念頭におけば、右の實例は一層よく理解される。英語の can や獨逸語の können が「知る」といふ意味から轉じて能力を意味するやうになつた過程はどんな風なものであつたか、詳しく専門家の御教示を受けたいものである。

（附記）一昨年書いた「國語にあらはれる一種の母音交替について」〔音聲の研究第四輯〕九九頁に「進毛 不知退毛 不知恐美 坐止久 宣（十四詔）を引いて「ススミモシラニシリゾキモシラニカシコミ マサクトノル」と振假名したが最後のノルは言ふまでもなくノリタマフの誤である。謹んで訂正する。

（昭和八年九月十九日）